第三集之自序

鉾把天。衛禮宮人。九重廼。御揩能佐樂。風戰玖奈理。ものを。孝明天皇の御製ありとぞ。這時ぞ當り。義を重んじ命を拋ち。身を尊攘に御楯と做んと。草莽より

奮起せざるも不勘。美名を正史に載るあるまじき。朽名を口牌に傳るなり。就中侍従忠光卿の如きは。義兵を大和の五條に擧げ。芳名吉野の花の春風に誘ふが如く。或は利に迷ひ義を辨ぜざる姦佞。島田左近が如きは。朽名を高瀬の川水と共に。千歳の末に流さん。或は宰相の太夫が如きは。既數國を脱して嵯峨に屯し。書を朝廷に献じて。主將の誤を解く。赤心恰も紅葉の旭に映ずるが如く。或は櫻田の十七士。恥を一刀の

下ハ雪ゞ。其勇傑時ヲ徒んぞ屈せざる。實ハ雪中の梅花ヨ。操あるかの如し。是皆我大和魂なり。他邦の人為ん。能遠ざかる所。現今遠く萬里ハ通信做さゝ雖皇州の美風獨冠ヲ。既ハ本編ヲ説く。將軍上洛ヲ。島津氏毛利氏の綜ハ遠ぶと眼目とす。看官猶愛玩を願ふと云爾。

明治七年十月上院柳東書屋の笆陰菊僅ハ一株開くの朝

紅雪生春輔題

西海の咽喉り毛利氏各國と闘ふ

大和の行幸を止んと三藩議を決せ

夜古事物語 第三編上

第八

四

松村春輔編次

再説勅使三條實美卿副使姉小路公知朝臣も既に柳營上段の廣間に勅意を陳べ曩に醜夷渡来の砌より深く聖慮を惱為せしより幕府旧習を新政に且明春上洛の土諸藩を率ひ夷虜を掃攘し

叡慮を安ん奉る可き仰渡さるゝ将軍を
始め参政の老臣等も謹で勅旨を尊奉し即日勅使
副使の二君を別殿に饗應し其の儲け更に
注意ひなり恁て勅使を同七日東武を御發輿なり
毛利少将（毛利侯一位敬親卿之男ナリ）御途中の守衛之に隨
ひ同月廿三日入京歸殿在為ける是嚮幕府の
大ひに擯斥なり茲に井伊直憲が封石の高拾萬石を

召揚らるゝ這は其父直弼の罪科に依りて又家臣長野
主膳は直弼の惡を補けし奸首なりとして斬罪に所為
らる尚亦元閣老紀州信思同間部總州詮實勤役中不
正の始末取調べ其罪に依り各加増一萬石を召揚らる
蟄居せらる堀田鴻之亟其方父備中守正睦入道見
山閣老勤役中外夷取扱ひの儀に就不束の次第なりとて
蟄居せらる元閣老久世和州廣周勤役中井伊直弼

横死の砌不正を取扱ひたる罪科により家録の中一萬
石召揚長く蟄居申附息謙吉へ家督の儀申渡さる
同安藤對州信正同断の罪により家録二萬石召揚
蟄居のうへ息隣之助へ家督せらる同松平伯州宗秀
戊午の裁許不正のうへ直弼横死の砌上聽を欺き
るゆへ先年村替申附置たる處尚家録一萬石と
奮地かへ隠居家督を養子主水正へ申附らる

脇坂中書入道揖水も閣老勤役中政道へ宗うたる
行ひなるとも慎を申附らる水野左京大夫忠寛
閣老中直弼へ阿諛ひ尤不正の所業在るとなつく差
控を達せらる其外吏人の旗本等へ至る迄許多の嬪斥
なりく尚又東武へも政事一層の改革做んとするゆ
天朝へ對奉り恐縮の餘り有りとなく官位一等を
辭退あるゝゆ御許容あるゝとも同月廿三日京都

守護職として會津少將松平肥後守容保朝臣入京
なりて東山黒谷に在陣あり又東武より廿九日薩藩
川本幸民杉田玄瑞津山藩箕作玩甫等と洋書調所
教授と做せり此日將軍明年海路より入朝せんと令を
出し後又陸行と做せり是歳諸藩の入京せしもの凡七十
餘藩に及ぶ旗下の士に至りては投舉為べしと
各京師に邸宅あり大寺院を假に本營とせり

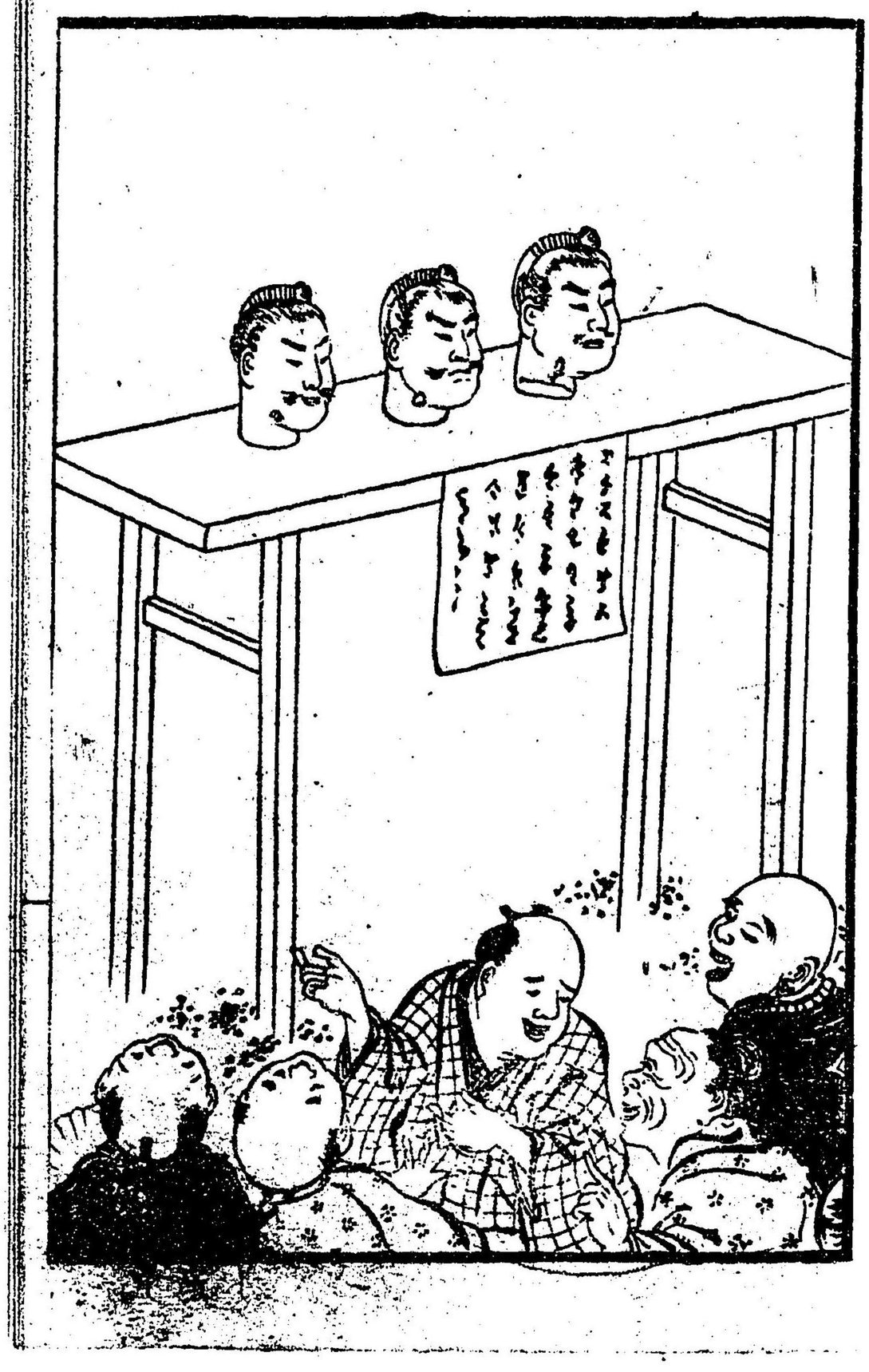
洛中洛外端々に大小寺院殘らず陣營となり
なるに後にて登京為られしに遽に市屋を買求め邸
宅と為るもなり又吉田白川山端邊御室嵯峨松の尾
西の岡にも陣所を儲け市中に諸藩士騎馬歩行の
徘徊充滿して遊興見物大に賑ひ都の繁昌前代未
聞の繹なりけり斯て壬戌の年も暮し翌癸亥文久三年
の正月元旦の朝賀として在京の諸侯各官位に

順ゞ衣冠と王〻裳束の袖とゝ〻糸供廻りゆゑ布衣白
丁と着せ行烈頗る目覺〻〻参　朝せらる九門の外
ゆゑ長柄鋏砲引馬の類ひ主君の退出を待者群を
做〻夜ゆゑんとするや挑灯高張の准備ゆ宮中恰る
白晝の如〻斯まして　朝威の盛んゆゑ前代未曾有の
ことゝや同五日一橋中納言京師ゆ朝〻六條本願
寺ゆ滞陣なり閣老小笠原長行水戸の藩武田伊賀
守等之ゆ随従ゆ六日佐賀老侯閣叟東武ゆ着せ此日
曾人江戸ゆ来り英佛兵を舉ゝ襲ゝんと為る旨を忠
告せ同日將軍親ら佐賀老侯ゆ命じて文武の事ゆ関
ゝゝむ此日山内容堂上京為んと横濱を發艦せ茲ゆ
ゆゝと京師在滞の有志を後見職一橋中納言東六條ゆ
着なゝと聞まりも我先ゆと馳付攘夷の期限切迫の
談判ゆ及びゝゝ大樹上洛の上神速ゆ期限を定め

爲〻と答へらるゝければ浮浪の有志大きゝに渇望を失ふ
憤激の餘り縡に及ぶんとす二十二日越前春嶽侯も京
師に朝せんと東武を發せ這日大坂ゆて浪士等儒者
池内大學を殺し首級を難波橋に梟し其両耳を斬り
一ッを中山大納言一ッを正親町三條中納言の邸に投ぜ
後に両卿這の暴行を避んとし議奏を辞退せり蓋大
學は戊午の頃專ら攘夷の説を唱へ士氣を鼓動せし

者做りしが當時交吏と結據為るもて此禍に羅しと
くや同二十八日千種家の臣賀川肇と暗殺し其首を
三寶に載一橋侯の旅館に持參這肇成る者を戊午
以来島田宇郷等と幕意に阿諛ひ奸曲を逞為る者
做るにより天誅を加へ攘夷の血祭りに之を献ぜと
書記し旅館玄関に投置り又其片腕を斬り千種家へ
出し又片腕を岩倉家に出せしとぞ是皆攘夷期限の

三輪田等
足利三将の
木首を三
條川原ゆ
梟す



因循做ると怒り浪士の慷慨這ふ及ぶ是嚮近衛左大臣忠熙公関白職を辞し鷹司右大臣輔熙公之ゆ代り関白を任じ茲ゆ又二月三日より同十二日まで英國の軍艦都合八艘横濱ゆ来泊し同十一日のとけん熊本藩士東武兵衛萩の藩士久坂義助瑞龍寺島忠三郎以下數名関白殿下ゆ逼り攘夷の綜と奏し其期限を促ゆ同十三日大原左衛門尉裏辻侍従禁

錮せらる這ゆ幕府の頼むとなり両名不正のなれば成敗〳〵這日将軍入朝せんと江戸を發し道を東海道ゆ取る山形矢松山矢等數名之ゆ従ゆ當時朝廷日の御門外ゆ學習院を設け諸士を〳〵國事を建言せむ有馬家より青蓮院の宮の才武を稱し朝廷幕府ゆ薦む因て宮を還俗せ〳〵め中川の宮と稱し廣小路一乗院の宮ゆ假殿を設け彌國家の為盡

力ありて　御威光甚しかりし　同月二十二日のことなり
洛西等持院に在し足利尊氏義詮義満三木像の首を
斬り三條河原に梟し其側に掲書して賊魁源
頼朝より北條足利に至り凶逆を逞ふ為ること數ふべ
らず我等五百年前に生を其生首を拔き能くも遺憾
山の如く積もれば今より不臣の者を誅戮せんと此如
くと茲に幕恩を蒙むる者い心良らざるものなし

足利氏の凶暴を唱へ幕府に擬せる事あるを將軍も
又上洛の近きに怒り斯忌々敷振舞を做せるなり
安のうらみ深く其黨を嚴密に詮鑿遂ぐべき旨守護職
會津少將手の者に命じ其探索嚴しく其黨即
ち露顕及び縛に就ものを衣棚二條に住せる浪士。
三輪田綱三郎。諸岡節齋。宮和田雄太郎。建部建一郎。
青柳健之助。成り又高松起之助。仙石佐太雄の其場に

死せ其外長澤誠平。大庭匡平。長尾郁三郎。山田綱夫等を處々に潜伏為すこと幾日を追ふて縛に就き就て獄に下る其餘の黨を脱走し遂に分明あらざりけり這縛に就き毛利少將封廣侯　朝廷へ歎養す

今般浪士の徒等持院の擧を起せるそ全く足利氏の凶逆を惡を名分を明らかにせんと為のみにて毫も私心を抱きたる者に非ざるを寛典の御所置

在為らを謝罪のうんとを上書なりしに越前中將會津少將之を拒を遂に出牢のことを聞届けなりし然るに之より浪士の徒を毛利侯を慕ふと主將の如く尊敬せしうを長州家の威望海内に並ぶ者なし這時德島侯蜂須賀氏より馬十匹を　朝廷に献ぜ時に會津少將の令とを不日將軍上洛の上に攘夷の期限を決せ就て浮浪士を用に立ぐき者共を抱へ

置べきとて鵜殿鳩翁とゐる者を取締り浪士を扶助せ是より浪士二流と成り幕府ゐ附屬せるを新徴組とゐ壬生ゐ屯集為るを俚俗壬生浪士と稱ふ又毛利家ゐ屬せるを正義浪士と称ゝるとぞ

是嚮二月十九日英國の軍艦壹艘品川沖ゐ碇泊し國書を幕府ゐ出しゐ去年武州生麥村ゐて嶋津三郎我士官を殺せり依て三郎の一族を我等の眼前ゐ

ゐゆゑ其首を刎よ若然らざれば則日本政府より贖金五十萬元を得て鹿兒島より三萬元を出さもべし是又領せざれば直ちゐ軍艦を卒ひ来り兵端を啓うん因て今より二十日の間ゐ返答せよと日を刻して通る時ゐ將軍を入朝せんと暴ゐ江戸を發し一橋中納言越前中將る皆京師ゐ留りゆきて閣老等大ひゐ狼狽し將軍の東歸を俟ち事を決せんと諭すと再三

即ち急と将軍ハ報ゼ両頭分發話是より先京師ハ
てゝ三條中納言阿野中将正親町少将姉小路少将
山内容堂以下數十人一橋中納言の旅館ハ来り攘
夷の期限を逼る毛利少将も亦関白鷹司右大臣を
促がせ皆将軍の上洛を俟ち之を處せんと答へらるゝ
より空手各将も歸殿あり茲ハ三月四日将軍ハ
京師ハ朝ゝ二條の城ハ入りゆふ先供ハ榊原式部
大輔政敬。阿老板倉侍従。水野侍従。参政。稲葉長州正
邦。田沼玄蕃頭意尊。君側坪内伊豆守。室賀美作守。村
松出羽守。佐野伊豫守。陸軍奉行。大關肥後守。講武所
頭取。一色仁左衛門。塚原治左衛門。這外鐵炮方。書院
番頭。小姓組頭。小納戸頭取。大目附殿り供奉小笠原
大膳太夫忠幹。供押松平隱岐守勝成。其外使番祐筆
醫師ハ至るまゝ總而三千餘人と聞えゝ這日伊勢

両宮へ別　勅使として柳原中納言光愛卿藤波伊
勢権守教忠卿参向為らるゝよりて当日将軍ハ未
明ゟ入京做〻ゆゑ公ぬるも勢ひ　朝廷の御威光ゟ
恐怖〻縛の茲ゆゑ及ぶ成るべ〻

第十回

徳〻四月七日将軍ゟ　天機御窺として参内為るよ
供廻りゆゑ閣老小笠原圖書頭板倉防州。松平豊前
守以上閣老水戸中納言慶篤卿。仙臺中将慶邦朝臣。佐竹侍
従。米澤少将。各束帯騎馬ゆゑ之ゟ隨ひ隨臣小栗
下總守。松平若狭守。案内供廻り講武所の面々も慰
斗目麻上下ゆゑ前後ゟ連ゟ又與力同心ゟ辻々を
警衛ゟ扨将軍よりの　朝廷へゟ献上ゟ御太刀（新藤五國光）
一腰鞍置御馬一匹黄金百枚白銀千枚御懸物一幅
御衝立一對青磁御香爐御料紙硯筥御扒御屏風一

初集の漏したる
梅田雲濱が甲寅
の古語
妻臥病床児泣飢
挺身直欲拂戎夷
令朝死別兼生別
唯有后天后土知
偐古三上十三

雙蘭緒五十卷綿千把這餘親王方准后方へも献上
なり又和宮天障院よりも夫々ゐ進呈の品なり徳
将軍も　龍顔を拝せらるる　天盃を賜ふ午後八時
の頃退出なり　這度将軍上洛を總て三代将軍家光公
上洛有し旧典ゐ倣ひ京師市中の者どもへ黄金を
給ふ其高五千貫ゐ及ぶ諸民皆寛仁の洛ゐ潤ひ頗る
賑ふ　這金六萬三千圓余ゐして洛中住公武の扶持

人を除き竈一軒分ゐ金一圓二十五錢ゐ當るとしりゐ
既ゐ将軍も目出度上洛のと終りしらば不日攘夷の
期限も決為るまじ　御親征の叡慮もなからせらるる
けるば将軍ゐも供奉なるべしらのとゐよう四月十一日
御首途の神詣し　鴨両社ゐ御出輦可在しる御供
ゐも開白前右府輔熙公。二條右府齊敬公。左大将忠
房卿近衛亜相右大将公純公徳太寺右府庭田中納言重胤卿日

野新大納言資宗卿。德大寺中納言實則卿。飛鳥井中
納言雅典卿。橋本宰相中將實麗卿。新宰相中將公正
卿。清水谷少納言修長朝臣。中將方ゆゑ櫛笥隆韶朝
臣。油小路隆晃朝臣。東園基敬朝臣。滋野井實在朝臣
少將ゆゑ姉小路公知朝臣。正親町公董朝臣。四辻公
賀朝臣。東久世通禧朝臣。侍從ゆゑ中山忠光朝臣四
條隆謌朝臣。職事ゆゑ中御門左中辨經之朝臣清閑
寺右中辨豐房朝臣坊城右少辨俊政其外下官人ゆ
ゑ
至る各供奉〳〵ゆゑ又前後ゆゑ武家方供奉
ゆゑ其方々ゆゑ大將軍德川内府家茂公。水戸中納
言慶篤朝臣。一橋中納言慶喜朝臣。閣老水野侍從忠
精。板倉勝靜。參政田沼意尊。稻葉正己高家。横瀨貞國。
中條信禮。京極高福。有馬廣聚。町奉行。滝川播磨守。附
武家ゆゑ松平若狹守。諸侯ゆゑ上杉少將齋憲朝臣。

伊達中將慶邦朝臣蜂須賀中將齋裕朝臣細川少將
廣順朝臣池田侍從修長朝臣宗侍從義達朝臣佐竹
侍從義堯朝臣伊達侍從宗城朝臣宇和島春山亀井隱岐守
茲監朝臣各官位相當の衣冠を着し束帶を做し飾
をよそをひ若駒のうち跨り月卿雲客と倶に袖を
連絡鳳輦の前後を圍み美々しく供奉したまひ
けるに誠に目覺しかりしに總列の前後に銃

隊數百人附隨ひ御道筋に武家麻上下を着し
嚴重に警衛せり實に我皇國の御威德いかに
たくましかるに然るに這日を御行列遥拜を許る
さるをけれども近國近在よりも聞傳へ行幸を拜せん
と都鄙の貴賤老若男女我先にと加茂の川原に群
參し道路に伏し拍手を打ち倶に感拜做しけるに
同十二日島津久光建言しに臣久光再度登京

の上輩下の形勢を察するに國家危急の秋あるを
鄙言を顧るに愚見を献ずるも毫も採用有る
なく却て　公武の齟齬を生じ讒者を逞ふする
に至り恐懼に堪ざ而しく攘夷御決儀の上も國内
も三面海岸成るを以て寸地も醜虜に掠奪致さ
ざるべき防禦の准備仕度くと上書做しその儘
十七日歸國なり這日毛利少將兵庫に下る此餘在

京の列藩國に歸る者甚だ多し這も先に不日攘夷
の舉あるべき沿海の諸藩に暇を給ふことなるを以て
なり　茲に又英國よりの難問の事なるより將軍
も東歸せんと　朝廷へ請ふとのことなる將軍歸
國なりしに東西相隔り　君臣の情通ぜざ暫時輦
下に止り猶も諸侯に指揮を竭し攘夷決定まで在
京なるべき旨達せらるるより　又英國へ返辞を三

英國の事ハ
依幕吏等
東西ヲ往
復セ

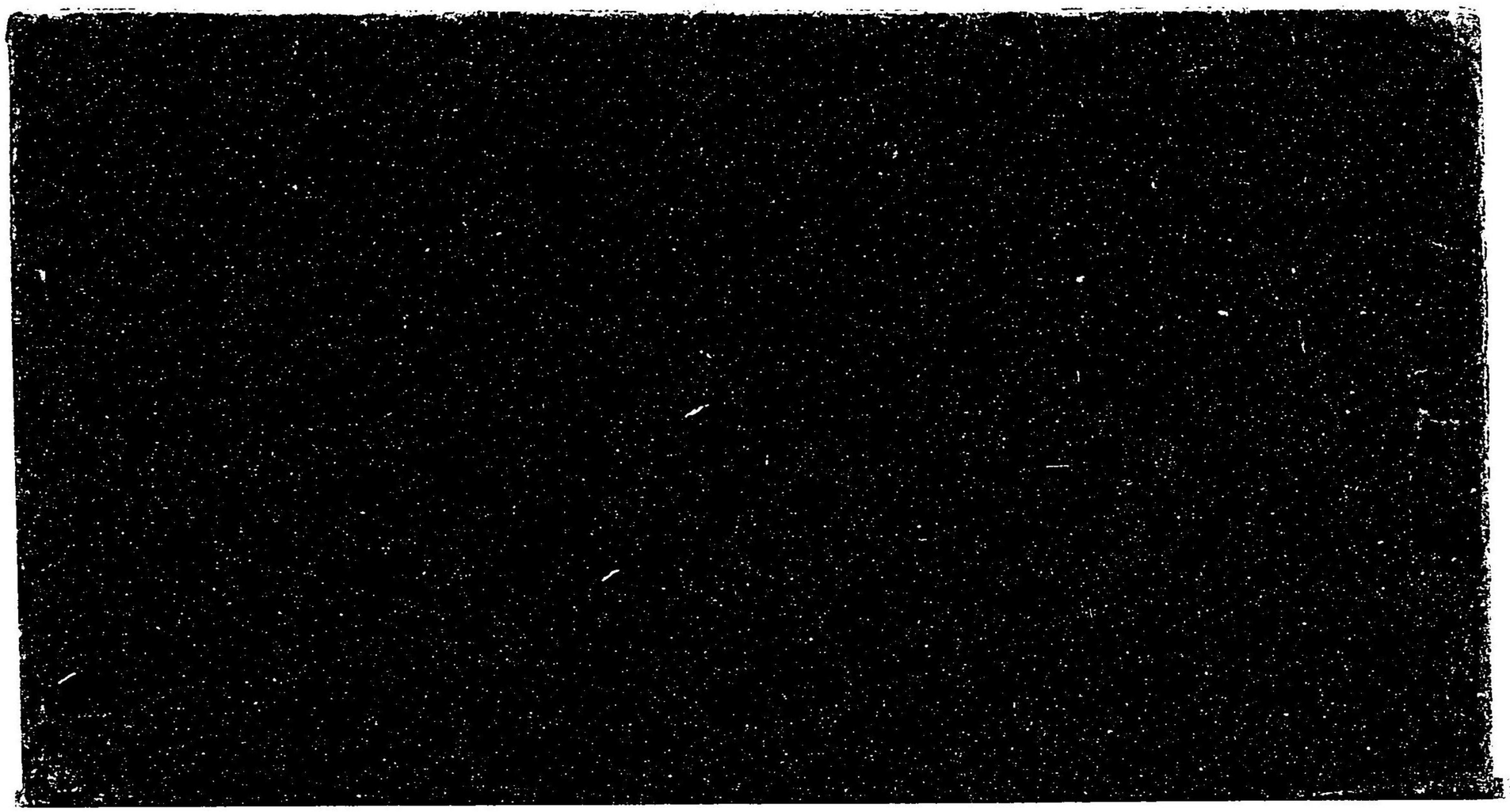
十日延んことを謀る此日將軍一橋中納言板倉周防守小笠原圖書頭等參内し給ふ　朝廷乃ち五月十日を以て攘夷の期限とし之を諸藩に公告し其大小に准じ急に親兵を貢ぐしむ同二十二日越前中將辭職を請へども許さざるも京師を脱し本國に歸へる　朝廷其の不束を糺問し自國に於て慎しむを命ずる這い中將其の職に在りしこの至難とあるひ遂に故ありしこと是嚮中山侍從忠光も幕吏稍も天朝を欺き又輕侮の所置なるを深く憤激し官位を辭して猶も有志に奮起を施し素心を遂んと京師を脱し所々漂泊し森秀齋と變名し遂に長州に入る先に攘夷の期限五月十日と決せるとのことも將軍竊に其意を報ぜざること同二十三日酉の刻俄

うゐ参　内〻関東の事情切迫成るをるつく必ず
東帰せんとを乞めゐ　朝廷之を許さんとを然る
ゐ二十五日ゐ至り　朝議遷ゐ変じて将軍の東
帰を留め水戸中納言ゐ東武の支件を委任ゆるく
将軍ゆを暫時滞京有る可き旨仰渡さるゐより水
戸侯ゆを小笠原壹岐守を属し将軍留守中の目代
を兼ね英國への返答の事を司どらしむ茲ゐ東武

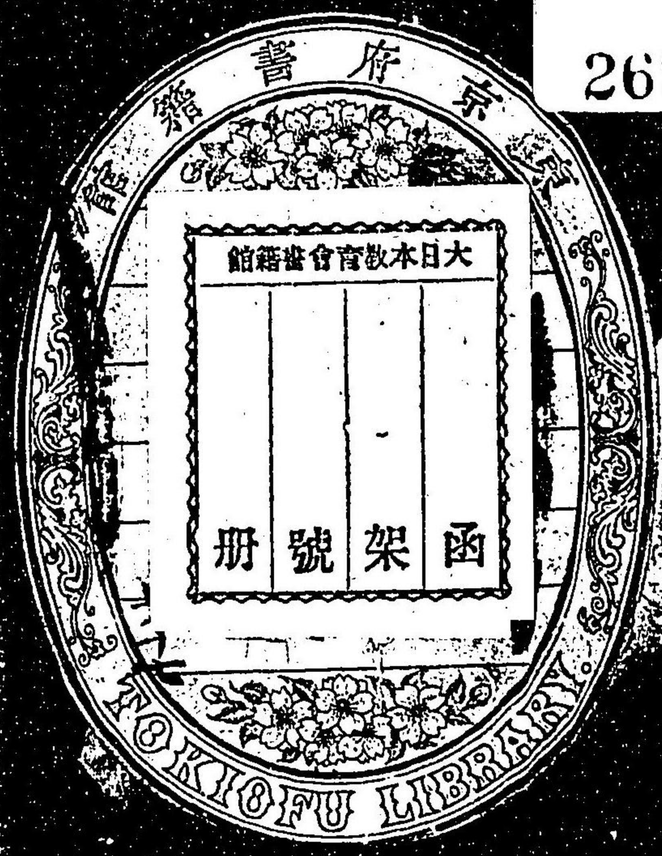
ゆを同月二十九日邏卒半七及び文助を殺す何
人の做す所を為るを此月より新徴組の徒擬
夷の軍用と稱し市中の豪富ゐ金を募ること後彌
甚しゐ之ゐよりつく幕府ハ秋田小田原庄内高崎中村
の五侯ゐ市中の巡邏を命ず這を浪士の跋扈為る
をるつくあり或日新徴組の徒市中を掠奪為るゐ和
をもつく制為るを浪士強暴服せざるより遂ゐ其

黨の中二人を斬り首を両國橋に梟す然るに四月十三日のことなり新徴組の魁首清川八郎を殺せし何人の做せしかを或るひは幕府命令にて暗殺せしものなりと八郎を出羽人江戸にありて專ら攘夷の説を唱へ江戸の人安積五郎其餘同志の者を語らひ關東を煽動し曾て人を殺し幕府の逮捕嚴成るに及び脱走して北越より奥羽に走り終に潛行京師に至る則ち攘夷の説大ひに起るを以て八郎乃ち在京の薩長兩藩士と數度時に幕府謀る所ありんと諸國の浪士を江戸に集め俸餞を給ひ是を新徴組とし八郎を這の機に投じ會津藩尚諸有司に説き舊年の罪科を解し江戸に下を遂に新徴組の魁首と成る其徒五百人凶暴不羈のもの成るに及びて前件のことに及びしも此徒横濱

を襲ぐんと為るの風聞ありしかば幕府も至難ふ
及ぶを恐る人をして遂ふ魁首八郎と懸し尚殘黨
二十八人を捕へ市中ふ新徵組の亂暴漸く
鎮靜ゆるとあん



特41
269



大日本教育會書籍館
函 架 號 册